

2010年10月2日
愛媛大学法文学部総合政策学科
グローバル・スタディーズ・コース 2回生
佐藤聡美

JMAS カンボジア滞在の研修報告書

日時：2010年9月6(月)～10月1日(金)

訪問場所：カムリエン郡タサエンコミュニン

バタンバン(2日間)

プノンペン(2日間)

1. はじめに

今回の27日間という長期研修を許可して下さった、東京のJMAS本部の皆様、実際に現地で受け入れて下さった高山さん、高田さん、JMASバタンバン事務所の皆様、プノンペンの渡辺代表、佐藤様をはじめ、事務所の皆様、本当にたくさんの方にお世話になりながら研修を無事に終えることができました。本当にありがとうございます。また、危険な地だという認識を持ちながらも、私の意見を尊重して見送ってくれた家族には感謝の気持ちでいっぱいです。27日間は、海外経験の無い私には全てが新鮮で心に強く刻まれるものでした。活動見学はもちろんのこと、自分自身を見つめ直す素晴らしい機会を持つことができました。現地に来たからこそ見えたものは、これから先の私の人生でとても大きな意味を持つものだと確信しています。この機会を与えて下さり、お世話になった家族や関係者の方々に心よりお礼を申し上げます。

2. 研修に至る背景と目的

以前から地雷撤去という仕事に大変興味を持っていました。きっかけは、中学生のときに見た資料集の写真に写る被害者の子供でした。その子の大きく映る目が忘れられませんでした。そのときから、「実際に現地に行きたい」と強く思うようになり、同時に「自分にできることはないだろうか?」と考えるようになりました。そして、このたび、皆様からの協力を得て実際に地雷撤去の活動に携わっているJMASのカンボジアでの研修をすることができました。

この研修にあたり、三つの目的を持って取り組みました。

第一に、実際の現場を自分の目で見て、自分の抱いている仮想と現実のギャップをなくすことです。高山さんがよくおっしゃるように「現場に真実がある」ということばのように、現場を見ずに現状を知らないまま国際関係についての勉強をしてもあまり意味が無いかのように思えたので、きちんと現実に向き合うという意味でも心がけました。

第二に、JMAS の活動は住民参加型という画期的なものであり、住民への実際の影響力はどのようなものか、といことです。大学の講義の中で、住民参加型の NGO の存在を知り、「何かをしてあげる」などの上からの目線ではなく、住民が問題意識を共有し解決していく上で「住民をサポートする立場」でいることがとても大切なことだと思いました。そこで、実際に実践している NGO に受け入れていただくのでその影響をできるだけ多く自分の目で見ようと心掛けました。

第三に、現地の人とできるだけ関わり、その生活を知るといことです。住民参加型という取り組みは、現地の人とのコミュニケーションが大切だと考えます。ですので、住民参加型の活動を正しく理解する上でも、住民とのコミュニケーションは欠かすことのできないものと思い、会話張を見ながらの会話や行動を共にすることを心掛けました。

以上の三点に重点を置いて活動に参加させていただきました。

○地雷除去活動○

3-1) 地雷原までの道



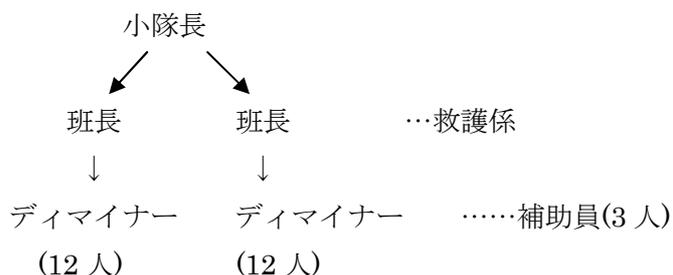
以前の道は細く使いがっても悪かったところが、JMAS の活動のおかげで綺麗な道ができたそうです。このことにより、地雷原までの移動時間が大幅短縮され、ディマイナーたちの行き来にかかる負担も縮小されたそうです。

ただ、現在はその上にさらに赤土を置いて道を固めてしまったため、雨が降ると土がぬかるみ、車も自転車もバイクも通りにくくなってしまっていました。この道はお寺へと続く道であり、仏教を重んじるカンボジアの人にとっては大切な道なので、現場でいち早く住民の負担に気づくことのできる高山さんは、カンボジアのお盆の時期までに間に合うように工事のことにも気を配っておられました。

3-2) 地雷原での説明

地雷原に入る前にまず安全確保のためにプロテクターとヘルメットを着用します。そのあとに、小隊長がいらっしゃるテントまで歩き地雷原の説明を受けました。カンボジアでは、ベトナム軍・政府軍・ポルポト軍の3つの軍隊が地雷を埋めたそうです。また今回見た地雷原は激戦区だった147高地付近の為、大砲のかけらや銃弾といった金属片が大量に発見されており、不発弾も発見されるということを伺いました。

<小隊の構図>



(右:小隊長 左:プロテクターをつけた通訳)

3-4) 地雷処理の作業

地雷撤去の活動を見学する前に、各地雷原で、小隊長による地雷原の説明を受けました。実際に撤去している現場を生で見ると、平和なところで育ってきた私にはかなりの迫力がありました。特に、金属探知機が反応して、ディマイナーがより慎重に作業をし始める時は、何とも言えない感覚になり、ただ息を飲んで見守りました。わずかな金属片でも金属探知機は反応するので、かなりの神経と時間とを使う作業だと改めて感じました。金属片は見させていただいた、どの地雷原でも数万個発見されているとの説明をうけ、そのつど、ディマイナーの方が緊張しながら土を掘っているのだと思うと本当に気の遠くなるような作業だと思いました。

また、今回は地雷の爆破処理も見せていただきました。離れていてもわかる、すごい爆音と振動によって、地雷の恐怖を肌で感じることができました。



(実際に作業をしている様子)



(爆破処理の様子～200mの距離～)

3-5) 地雷被害者との出会い



戦時中に地雷を踏み右片足を失ったケインさん(写真左)とお会いし、話を伺うことができました。写真は髪を切っている最中のもので、義足?をつけていらっしやいましたが、部屋での対談の際は、外されていました。やはり、本人にとっても義足は違和感があるみたいです。ケインさんは戦時中ポルポト軍の一員として働いていました。少年のときに政治教育を受けに行っていると、気づいた

時には兵士として戦場で戦っていたそうです。戦時下では自分たちの身を守るために地雷を埋めたこともあったそうです。

ケインさんに地雷について伺うと、「地雷は土の中に入れて分からないものだからどうしようもない。」っと、おっしゃっていました。この言葉に地雷の怖さの全てがあるように思いました。

ケインさんは元兵士だとは思えないくらいに気さくでお優しい方でした。地雷についての質問も嫌がることなく答えて下さり、その気づかひに感心させられるばかりでした。そして、こんなにも優しい方の片足を奪った地雷という兵器も地雷を埋めざるおえない環境も全て、人間が作り出したものであり、今後そのような事を起こさないように平和な世界になること願わずにはいられませんでした。お互いを思いやる心が平和を作るなら、それをまさに感じ取れるのはタサエンであり、そこに住む人々の優しさだとおもいました。

3-6) 撤去した後の土地利用

地雷が撤去された後の土地は、道路(3-1)の写真のマンゴー道路)として利用されたり、生

産力の高い農地として利用している。地雷撤去の活動を行っているタサエンでは住民の90%以上が農業で生計をたており、今まで地雷原として10年以上手をつけられていなかった分、生産力の高い肥沃な土地ではありますが、農業の知識を持ち合わせていないため、噂や口コミを頼りにその年の生産物を決めたりしているため、土地の資源の減少が懸念されます。また、収穫物はタイへの輸出に頼り、タイでの価格の約3分の1の値段で買ったかかっていることもあり、農民の生活向上も難しく、今後の課題として取り上げられる問題になるようです。

<大使館の方による視察>

元地雷原の活用状況を視察するために、JMAS プノンペン渡辺代表と大使館の方が、タサエンに来られました。JMAS は外務省による資金援助を受けているので、こうした視察が行われるのだそうです。高山さんは現場の真実を見てほしいと、CMACの方が選んだ視察地を事前に入念にチェックされていました。大使館の方も地雷原で担当者からの話を熱心に聞かれ、お昼はディマイナーと一緒に食事をし、積極的にディマイナーの方からも聞き取りをされていました。(JMAS 事務局注釈；視察目的は18年度カンボジア西部における住民参加型地雷処理事業の事後調査です。)



(写真右から、小隊長,高山さん,大使館の方,渡辺代表)

<住民参加型事業であることの、住民たちにとっての意義>

地雷撤去の活動は住民たちにとって必要なものです。自分たちが安心して暮らすためにも、雇用の面でもとても重要な働きをしています。

ディマイナーに質問をしてみました。

「なぜ、危険な仕事をしていますか」。

すると、

「家族の為に働いています。」とみんな答えました。ディマイナーの中には、ディマイナーとして働く前はタイへ出稼ぎに行っていた人や、本当に家庭の事情が厳しい人もたくさん

います。

また、「仕事は怖くないですか」と、質問すると、「コンポンチュナムで研修を受けたので」と、いう答えが返ってきました。ディマイナーになるためには、まず応募をして、簡単な質問のテストをうけて合否が決まります。受かった人はコンポンチュナム州のトレーニングセンターで6週間研修で機械の使い方やSOP(地雷原でのルール)を学びそれから地雷原での実際の仕事を行うそうです。

危険度を最小限にして、働いていると分かっている彼らにとって、ディマイナーの仕事は生活の糧として無くてはならないものとなっているようです。そのため、来年で5年が経つのでCBD活動が終わるのではないかと心配していました。そして、何より自分の村の為に働いていることを誇りにしています。これは、住民参加型という制度をとることで住民たちが自分の住むところを自分たちで良くしていこうとする気持ちが強くなったからだと思います。CBDの活動は単なる地雷の撤去というだけでなく、村人たちの生活の上でも、尊厳の上でも重要なものだと知りました。

<今と向き合う住民たち>

私は、自分たちの親が埋めた、または自分が埋めた地雷を撤去しているのは不思議な気がしました。「埋めた人を恨んだり、後悔したりしないのかな？」と無知な私は思っていました。しかし、その考えは間違いだったと、村人からも高山さんからも教わりました。ある、若い10代のディマイナーが話してくれました。

「昔は、戦争で生きるために親たちが埋めた。今度は安全になって生活をするために除去しているだけだ。」と。

高山さんからも、「良い悪いは別として、生きるために埋めたのを子供も分かっているし、過去は過去としてちゃんと捉えて、今をみている。」と、お話を伺いました。

カンボジアの人たちは過去を見つめた上で、地雷撤去という「今」を見ているのだと知りました。



(昼休みはみんなで集まってご飯を食べます)

3-(6) 7人の慰霊碑



地雷原の近くのお寺に、地雷処理作業中に対戦車地雷が爆発し死亡してしまった7人の作業員の慰霊碑があります。中には、死亡してしまった7人の写真と1人分の写真のスペースがあります。高山さん曰く、自分が死んだ時はここに自分の遺骨を置き、残りのスペースに自分の写真を置くように村人に言っているそうです。高山さんは、

タサエンの自分のもとに来た人には、滞在期間が短い人も含め、必ずここにきて説明をするのだそうです。3年の時間がたち、ようやく気持ちが落ち着いてきたそうですが、いまでもずっと責任をかんじており、そういう姿勢がディマイナーを始め、村人たちにも伝わり、高山さんと村人たちとの信頼関係ができてきているのだと思います。

○地域復興○

4-(1) 水源の確保



タサエンでは、井戸が生活用水の源として重要な役割をはたしています。JMASがタサエンで活動する前までは村全体で井戸の数は20個だったそうです。それが、98個JMASのサポートによって新たに作られ、今では118個の井戸が存在しています。しかし、「水が出なくなってしまった井戸や壊れた井戸を村人たちはそのままにしてしまうのでアフターケアを含めた村人たちの指導が大切だ。」

と高山さんは教えて下さいました。このことは、やはり現場にいて、村人たちと接するからこそ、わかることなのだと感心しました。

4-(2) 地場産業～SORA KHMER～

タサエンの代表的な作物キャッサバ(芋)を用いた焼酎会社(注)を見学させていただきました。(注：SORA=酒 KHMER=クメール DISTILLER=蒸留 社) JMAS事務局注釈
カンボジアの焼酎と言えば米焼酎であり、芋焼酎は存在していなかったそうです。ですので、焼酎造りをしていた地元の女性(写真右下の女性)から地元の技術をとりに、日本の焼酎技術も取り入れてタサエン独自の焼酎開発に取り組み、芋を加工して付加価値をつける取り組みを実践中だそうです。焼酎には、カンボジアの技術を使った米を用いての染色が

行われています。ここで作られた焼酎は、来月もしくは早来月には国内販売を試み、将来的には海外への進出を目指している。



(焼酎造りの工場の中)



(製品を手を持ったスタッフ)

<日本財団の方の訪問>

キャッサバを専門分野として、取り扱っている日本財団の間遠様が視察に来られました。タサエンのコミュニンで、タイで流行っているキャッサバの害虫被害についての説明をされ意見交換をされました。タイでは、キャッサバへの害虫被害が3年前から出ており、それをほっておいた結果3年目の今年は大きな被害が出てきたということで、隣国であるカンボジアでも今年から被害の傾向が見られ、農業で生計をたてているタサエンで被害が大きくなると深刻な問題を引き起こすことが懸念されるそうです。また、キャッサバを利用した焼酎についても深い関心を持ち熱心にお話を聴かれていました。間遠様とは、3泊4日活動をご一緒させていただき、その気配りの良さや、相手を気遣われた表現の仕方にはただただ頭が下がるばかりでした。

4-(3)タサエンにある日本企業

愛媛県の四国中央市に本社をもちタサエンに企業進出している JPC の会社を見学させていただきました。この会社は、女性の雇用の面でも地域貢献しており、タサエンにおいてとても貴重な会社です。基本給は月 40 ドル(家族が暮らせる金額)の出来高制を採用しており、ベテランの方になると月に 130 ドルを稼ぐ人もいます。

タサエンでの初めての会社なので、農作業しかしていなかった村人たちにとって分からないことばかりで、まず会社を綺麗することから、いろいろと教え、社員教育には相当な苦勞をしたそうです。今は、社員(村人)の方も仕事の仕方を覚え楽しく仕事をしており、昼休憩の時間も、ご飯を食べるとすぐに自主的に働きます。彼女たちが作っているのは日本のダイソーで販売されており、自分たちの生活に身近な事がカンボジアのタサエンという村で行われていることにグローバルの流れを感じました。



(会社で働く村人たちの様子)



(会社で作成する製品)

4-4) 日本語教室

タサエンの子供たちは、学びたい人は無料で高山さんのひらく日本語教室に参加することができます。日本の子供たちは、学校以外の塾などの教室へは、親が言うので行く。という感覚であまりいきいきとしていないように思えますが、日本語教室に通うタサエンの子供や大人の人たちはとても生き生きとして目を輝かせて授業をしています。表情も明るく、見ているこちらまで楽しくなれます。日本語のレベルは人によって通い始めの時期も違うということもありまちまちですが、私が見せてもらった日本語中級クラスの人たちは簡単な会話ならできるので、とても感心しました。日本語と会話張を見ながらの会話はもどかしい時もありますが、とても楽しく、お互いに身近に感じられたような気がします。



(授業の後、子供たちと遊んだ様子)

4-5) ゴミゼロ活動

タサエンではゴミゼロ活動の一環として、各家に1つずつゴミ箱を設置してゴミ拾いを呼び掛けています。しかし、タサエンではもともとゴミを拾う習慣がないのでなかなかうまくは行けず、広場で「ソムルソムラン(ゴミを拾いましょう)」と、呼びかけても、パレーをし続けたり、ビリヤードをしてなかなか協力してもらえませんでした。根気強く言

っているとポツリポツリと協力をしてくれる人が出てきて何とかゴミ拾いができました。もともと習慣がない分、継続的に広場を綺麗に保つには根気のいることだと思いました。



ゴミは、何か所かに分けて固め、その後その場で焼却処分されました。

(ゴミ拾いをしている様子)

5. おわりに

今回の活動では、高山さんや関係者、村人のご厚意で本当にたくさんの経験をさせていただきました。いろいろな重要な場所に立ち合わせていただき、プノンペンでは、渡辺代表・佐藤さん、その他皆様のご厚意で JMAS の送別会にも出席させていただき、オータクラ村では村長さんの家にホームステイをさせていただいたり、他の団体や会社でのインターンでは考えられない経験をさせていただくことができました。今回の研修では、最初の目的にも触れていた通り3つのことを心掛けましたが、それよりも一人の人間として成長することができました。何も知らない学生にも関わらず、優しく接して頂き、お世話になった皆様には感謝の思いが堪えません。この研修を通して、人を思いやることの大切さを改めて感じることができました。

本当にありがとうございました。



(お世話になったタサエンのスタッフの方々)